

まいぶん津

2024. 6. 1

第16号

高虎以前 一津城跡天守台下発掘調査の成果から一

はじめに

津市埋蔵文化財センターでは、令和5年9月に、津城跡天守台下の発掘調査を行いました(第6次調査)。津城跡ではこれまで、内堀の外側や重臣屋敷の発掘調査が行われてきましたが、本丸内では初めての発掘調査となりました。本号では、その発掘調査でわかったことを紹介します。

津城の歴史

尾張国の大名、織田信長は、戦国時代末(1560年代後半)に伊勢国侵攻を開始します。永禄10年(1567)には北伊勢を攻略し、三男信孝を神戸氏の養子とします。

永禄11年(1568)には、中伊勢に攻め込み、弟の信包を長野氏の養子(はじめ「長野信良」と名乗り、のちに織田信包と改めますが、ここでは複雑さを避けるため「織田信包」に統一します)とします。信包は、はじめ上野城(河芸町)に入ります。

信包は天正8年(1580)に津城を築き、そこに移ったとされています。その根拠は、江戸時代の記録等によるもので、現状の研究では、「遅くとも天正11年(1583)11月には津城を居城としていた」とされています。そのころの津城には五重の天守があったとされていますが、これも同時代の史料で確認することはできません。



天守台の下からはたくさんの瓦が出土しました

天正 10 年(1582)に起きた本能寺の変後、信包は豊臣秀吉と接近し、中伊勢の大名として秀吉の天下統一を支えます。しかし信包は、文禄3年(1594)年に秀吉により所領を没収され、丹波柏原(兵庫県丹波市)に移ります。

信包にかわり津城に入ったのは、富田知信でした。知信は、秀吉の死後、徳川家康に接近します。慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの直前には、徳川方に属した富田氏の津城に対し、石田方が攻撃を仕掛け、降伏して開城します。

これも江戸時代の所伝ですが、この時に津城にあった信包時代の五重天守が焼失したとも伝えられています。

慶長 13 年(1608)富田氏は伊予に国替えとなり、藤堂高虎が津城に入ります。高虎は慶長 16 年(1611)から、本格的に津城の改修に着手します。本丸では特に北側が拡張され、北東隅・北西隅に三重の隅櫓(丑寅櫓、戌亥櫓)が築かれます。現在の津城の姿は、この改修によって完成したとされています。

寛永年間(1624～1644)に描かれた津城下町絵図の写し(津市所蔵)には、本丸の南西隅に三重の天守と二重の小天守が描かれています。この天守がどの時代のものなのかが謎とされていました。

天守台裾の発掘調査

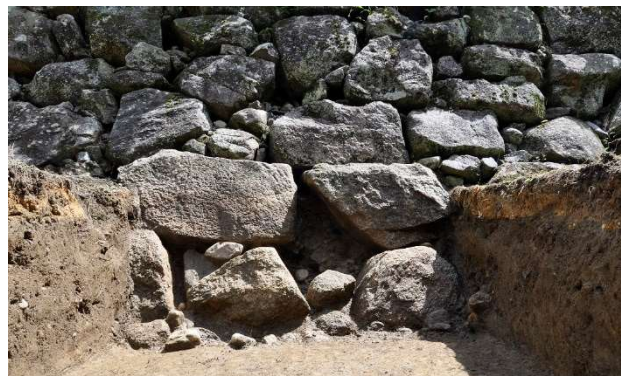
発掘調査は、天守台の西裾(トレンチ1)と南裾(トレンチ2)、小天守台の南裾(トレンチ3)で行いました。調査の成果は次のとおりです。

○天守台・小天守台石垣の基礎構造と築造時期の解明

天守台・小天守台の石垣は、隅角部(ぐうかくぶ、石垣の角の部分)や築石部(つきいしぶ、石垣の面の部分)に割石が多く使用されています。石材一つ一つの大きさや形はあまりそろっていません。藤堂高虎が積んだと言われる本丸北側の石垣は、隅角部、築石部とも切石で、石材一つ一つがそろっています。この違いは、石垣を積んだ時期の違いを表しているのでしょうか？

低湿地に造られる石垣の基底部には、「基底石」という大ぶりの石を据え、その下には、松材を井桁

に組んで、石垣の沈下を防ぐ「胴木」が使われています。津城跡の基底石や胴木の様子はどうなっているのでしょうか？



大天守西面の石垣



大天守南面の石垣



小天守南面の石垣

天守台西面、南面の発掘調査では、石垣の基底石を確認しました。いずれの調査区でも、地表に見えている築石の下に2段程の石垣があることがわかりました。使われている石は築石と同じ、大きさや形があまりそろっていない割石でした。基底石を埋めた土からは、織田期から富田期の瓦が出土しました。石垣の下には厚さ 1.5m程の安定した造成土があり、胴木は使われていませんでした。

小天守台南裾の発掘調査でも、石垣の基底石

を確認しました。いずれの調査区でも、地表に見える築石の下に2段程の石垣があることがわかりました。使われている石は築石と同じ、大きさや形があまりそろっていない割石でした。この部分では、織田期から富田期の瓦を含んだ土が、石垣の下に潜り込んでいることが確認できました。この土は、天守台では、基底石を埋めていた土と同じものと考えられます。ここでも、胴木は使われていませんでした。

石垣の石材に割石が多用されるのは文禄年間(1592～1596)の後半以降とされています。出土した瓦の時期と石垣から、津城跡の天守台は富田期のもの、小天守台も富田期のものであるが少し時期が下ると考えるのが自然でしょう。

○天守台・小天守台下にあった犬走りの構造と築造時期の解明

今治城跡(愛媛県)などでは、石垣と水堀の間に、「犬走り」という空閑地が作られています。これは藤堂高虎の石垣構築技術の特徴ともいわれています。津城跡本丸にも犬走りがありますが、これも藤堂高虎により築かれたものでしょうか？

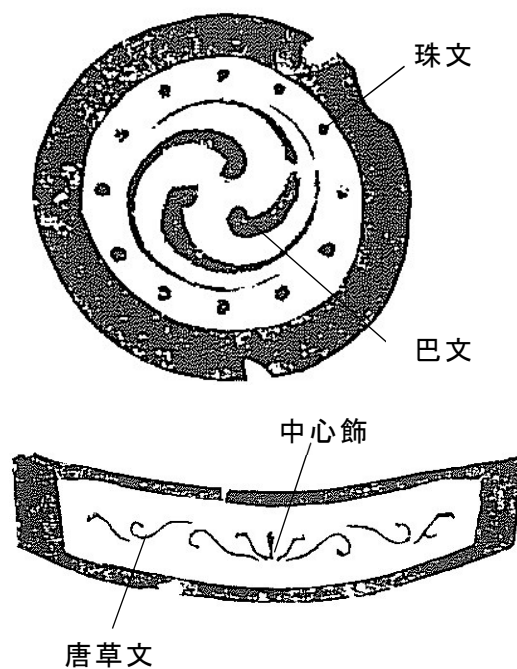
天守台西裾、南裾、小天守台南裾の発掘調査では、石垣の外側に犬走りがあったことがわかりました。ただし、調査区内からは犬走りの外側の石垣が見つかりませんでした。犬走り外側の石垣は、さらに西や南にあると想定されます。また、出土遺物のほとんどが織田期～富田期のものであることから、本丸南裾の犬走りは、藤堂高虎による改修以前のものである可能性が高まりました。

出土した遺物

発掘調査では、合計 118 kgの瓦が出土しました。これらについて詳しく見ていくことにします。

たくさんある瓦のうち、建物の軒先を飾る軒瓦には、特徴的な文様がつけられています。軒丸瓦(軒先を飾る丸瓦)には、「珠文」と「巴文」という模様があり、軒平瓦(軒先を飾る平瓦)には、「中心飾り」と「唐草文」があります。

今回の発掘調査で出土した軒丸瓦、軒平瓦のデザインを見ると、大きく三つのグループがあることがわかりました。



瓦の部分名称 (『松阪城跡本丸跡上段発掘調査報告書』松阪市 1992 から転載)

一つめは、直径 7mmほどの珠文と、右巻きで先端が長い巴文をもつ軒丸瓦と、先端がふくらむ3枚の花弁状の中心飾りと、巻きが強い唐草文をもつ軒平瓦のグループです。このデザインの瓦は、天正15年(1587)から文禄4年(1595)まで使われた聚楽第(京都市)などから出土した瓦と共通するもので、津城では織田期のものと考えられます。



織田期の瓦

二つめは、直径 1 cmほどの珠文と、左巻きで先端がやや長い巴文を持つ軒丸瓦のグループです。このデザインの瓦の中には、巴文の頭の部分が平らなものがあります。このような形の巴文は、文禄4年(1595)から慶長5年(1600)まで使われた伏

見城(京都市)などから出土した瓦と共通するもので、津城では、富田期のものと考えられます。今回の発掘調査で出土した瓦のほとんどは、この時期のものとなります。



富田期の瓦

三つめは直径 1.5 cmほどの珠文と左巻きで先端が短い巴文を持つ軒丸瓦です。このような形の巴文は、江戸時代後期の瓦に多く見られるもので、津城では藤堂期の終り頃のものと考えられます。



江戸後期の瓦

出土瓦からみると、天守台上にあった建物は、富田期のものであり、前身の織田期にも瓦葺の建物があった可能性があると考えられます。

まとめ

今回の発掘調査によって、天守台、小天守台が富田期に築かれたものであること、石垣裾の犬走りもすでに富田期以前からあった可能性が高まってきました。寛永年間に描かれた津城下町絵図の写し(津市所蔵)には、本丸の南西隅に三重の天守と二重の小天守が描かれています。ここに描かれた三重の天守、二重の小天守は、富田期のものであると考えられます。

藤堂高虎の津城本丸改修は主に北側や東側で、天守台周辺は富田期のものがそのまま残されていたようです。

これまであまり注目されてこなかった高虎以前の津城は、織田信包や富田知信により、大規模な築造、改修が進められていたこととなります。

【参考文献】

小坂宜広 2021『織田信包』(伊藤印刷出版部)

樋田清砂 1991「津城」(『定本三重県の城』郷土出版社)

藤田達生 2002「戦争と由緒—伊勢木造氏と小牧・長久手の戦い—」(『三重県久居市上野遺跡に関する総合研究』平成 13 年度三重大学重点経費(萌芽研究重点経費)研究成果報告書)

三浦正幸 2008「津城と高虎の城造り」(『藤堂高虎—その生涯と津の町の発展—』津市・津市教育委員会)

まいぶん津 第16号

発行日：令和6年6月1日

編集発行：津市埋蔵文化財センター

〒514-0058 三重県津市安東町 1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

